



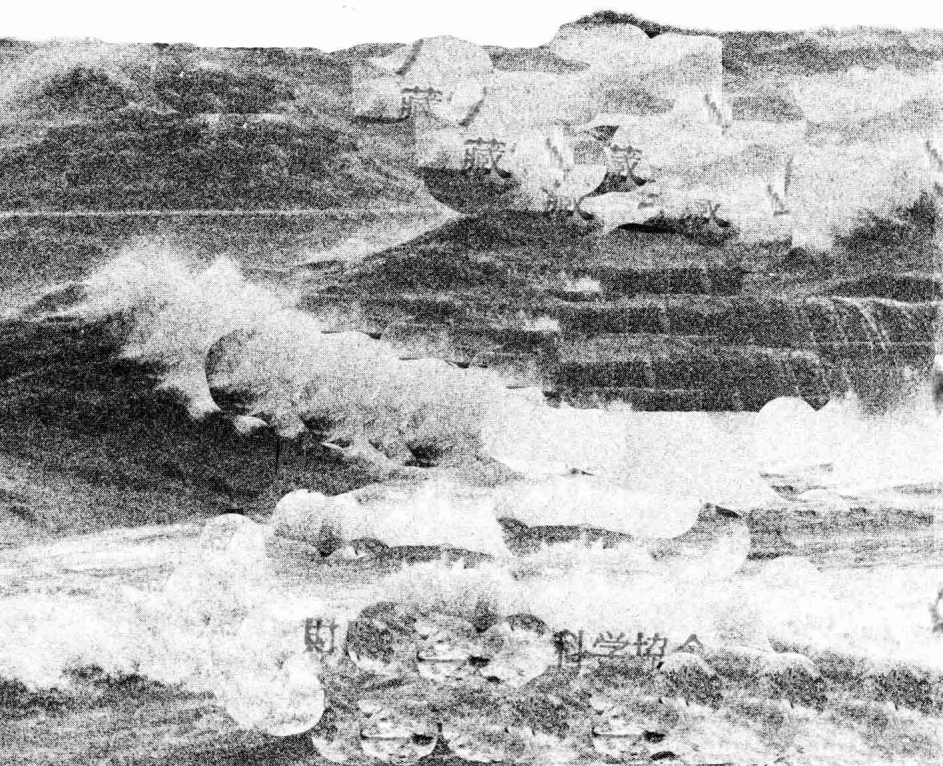
何処へ……

谷村新司エッセイ集

何処へ



谷村新司エッセイ集



何処へ●いずこへ●

昭和53年 7 月30日 初 版 発 行

昭和53年 8 月20日 第 2 刷発行

著 者 谷村新司

発行者 渡辺浩成

発行所 株式会社 八曜社
東京都渋谷区神宮前 6 - 31 - 21
電話 03 (499) 6001
振替東京4-9516

印刷製本 図書印刷株式会社

©1978, Shinji Tanimura

乱丁本、落丁本は小社にてお取り替えいたします

何処へ●いずこえ●

何処へ

風よなぐれ このほほを

流した涙と同じ数

友よさらば 忘れない

語り明かした 夜の数

人は誰でも 旅に出て

一人で生きることを知る

ああ悲しいけれど 今年も一つ

ああ悲しいけれど 年にとってゆく

焼けた砂の 道端に

ほこりまみれに 咲いている

そんな花の白さにも

小さなほこりと意地がある

人は誰でも 生きてきた

時の重さに 流されて

ああ悲しいけれど さすらえないで

ああ悲しいけれど 年とってゆく

人は誰でも 夢破れ

張り裂けそうな心だけ

ああすてきれないで 明日もきつと

ああすてきれないで 生きてゆくのか

序 文

かつて川端康成氏は、文をうまく書こうという邪念がなくなった時、行を起こした……そう伝え聞いていたものだから、私もそうするべきだと、軽薄にも考えた。それゆえ私は、原稿用紙に向かってただじっと、その時が来るのを待っていたのだが、うまく書きたいという邪念はつのるばかり……。とうとう邪念を捨てきれないまま、ペンを取って書きはじめてしまった。

どうせ捨てられないものなら、最後まで、うまく書いてやろうと思いつながら、書いてゆ

きたいと思っている。

なにしろ私ときたら、早く書けない上に、書きたくならないと書かない性分なので、この本のための文章を書きはじめてから、もう三回もの正月を過ごしてしまった。

だから、ひとつひとつの文章の末尾にでも、書いた日の日付けを入れておいたほうが良かったのかもしれないが、あまりにも弁解がましいので、あえて入れないままにしておいた。

そんなわけで、少々文章が前後したり、「おやっ？」と思われるようなものがあるかもしれないのですが、それはひとつお許し頂きたいとまず最初にお願ひする次第です。

もくじ

序文

第一章

アイス・コーヒー 14

葉見子 16

彼と私 23

神の子供という子供 29

一匹の犬 34

N氏の犬 38

徳島の犬 41

突発性絵画病 42

テレビ小僧 50

暗い過去について 53

真夜中のサンドイッチ 56

カサブランカ 58

ある日 61

正義の味方はもういない 64

シーツのあと 66

病院ブルース 68

無防備な顔 72

ボストン・マラソン 74

向かいの住人 77

閑話 80

敗者の顔 82

フラメンコ 85

ラスト・シーン 88

革命 90

第二章

街路樹は知っていた 94

大淀川“右岸左岸”旅情 100

横浜、山の手 106

佐世保にて 110

大分無情 122

札幌の夜 124

タクシー・ドライバーⅠ 127

タクシー・ドライバーⅡ 139

ありがとう、ありがとう 143

第三章

青森駅前広場 148

犀川のほとり 152

東京行き20便 157

見せ物列車 161

雨の日に 166

五月のある長い一日 169

夕暮れ 175

小さな仏壇 178

てるてる坊主 183

午前零時 184

ピック 186

最後に……	225								
死の顔	220								
フェニックス		216							
結婚	212								
同棲感	202								
アルバム『黒い鷲』									
プロ	196								
家出人捜査	193								
一九八〇年									188

写真——カバ―・扉装丁——藤本賢二
——長浜治・田村仁・大川装一郎

第一章

アイス・コーヒー

確か前作『蝸ひぐらし』の書き出しも、アイス・コーヒーの話題だったような気がする。あれから、もう何年たったのだろう。アイス・コーヒーの季節を何回迎え、何回通り過ぎたことであらう。

夏に冷たいものを飲みすぎると、秋になって髪の毛が抜けるなんて話も、何年も前からよく聞かされたものだ。

20代前半の頃は「そうか、そうか……」なんて感じて軽く聞き流していたのだが、しかし今は違う。

「やっばり、そうかな？」

などと、とても笑ってはられない心境なのである。

それにしてもアイス・コーヒーの、あの氷のカラカラという音と、ミルクがコーヒーと次第に混じりあってゆく時の色合いは、いつ聞いても、いつ見ても実に良いものである。

お店によっていろいろなのだが、ミルクをミルクポットごと持ってきてくれると、うれ